

## 第5章 社会全般

### 電子コミュニティ

#### 「グローバル・ヴィレッジ」は実現したのか

かつてマーシャル・マクルーハンは、電子メディアのネットワークがもたらす未来社会を、「グローバル・ヴィレッジ」とイメージした。時間と空間の意味を無化していく電子メディアのネットワークが、国境線をはじめとする伝統的な共同体を分かたささまざまな境界線を曖昧なものとし、最後には、地球的な規模の共同体を構成することになるに違いない。これがマクルーハンの予想であった。

われわれが共同体の境界線を重要な区別として意識するのは、共同体の内側へと向けられたコミュニケーションの密度が、その外側へと繋がるコミュニケーションの密度を圧倒的に凌駕していたからである。こうした密度の落差が生じるには単純な技術的理由があった。しかし、電子メディアの発達は、コミュニケーションの密度に有意差を与える、技術的な困難を除去してしまう。要するに、国内の誰かに電子メールを送るのも国外に送るのも完全に同じ程度に容易で、同じ程度の費用しかかからない。こうしたことを考えると、マクルーハンの予想も、全く当然のことであるように思える。

実際、マクルーハン以降、今日まで同じようなことがしばしばいわれてきた。それは、右翼と左翼の対立を越えている。たとえば、リチャード・バーロックとアンディ・キャメロンによれば、電子的なネットワークをめぐる言説は、右翼と左翼の政治的な対立を調停するような「カリフォルニア・イデオロギー」と呼ぶべき楽観を共有している。カリフォルニア・イデオロギーは、カリフォルニアの社会的雰囲気から醸成されたものであるとの認定から、こうした名を与えられているのだが、その内実は、要するに、新しい情報テクノロジーの人間解放の潜勢力への大きな

## インターネットは地球大の統合へのダイナミズムよりも多数の共同体への分解に向かう

信頼である。情報テクノロジーが解放をもたらすと見なされているのは、それが、「グローバル・ヴィレッジ」に比定することができるような、地球規模の共同性をもたらす得る技術的な基盤になると信じられているからである。

#### 遠隔地ナショナリズムの出現

インターネットが地球上のコンピュータを繋いでいる現在、一以上のような予想や期待に立脚するならば—地球的な共同体への技術的な条件は整いつつあると見なさなくてはならない。つまり、われわれの社会は、グローバル・ヴィレッジのような地球的な共同体に漸近していきなくてはならない。だが、20世紀から21世紀への転換期に、われわれが現実を目の当たりにしている現象は、こうした予想を全く裏切るものである。地球的な共同体の可能性は、地平線の彼方にすら現われていない。むしろわれわれはこうした理想や理念から遠ざかりつつあるように見えるのである。いい換えれば、共同体は地球的な規模へと拡張していくのではなく、むしろ逆に、近代の伝統が築いてきた拠りを切り崩すように細分化しようとしているように見えるのだ。

そうした傾向を代表している現象が、たとえば、20世紀の末期に世界各地で異様な盛り上がりを見せている、エスノ・ナショナリズムの運動である。19世紀から20世紀中盤までのナショナリズムは、前近代的な共同体を国民の内へと包摂し、最終的には国民—国家を確立することを指向していた。20世紀後半に発達した電子メディアは、こうした国民—国家の境界線を溶解させるはずだった。ところが、実際には、今日のエスノ・ナショナリズムは、国民—国家をより小さな民族の単位へと分解することをこそ目指している。境界線は溶解するどころか、む

しろ増殖しているのである。予想を大きく裏切る、こうした現象が生ずるのはなぜなのか。

まず、地球大の共同体へと拡大する力が作用せず、逆に、国民を分解させかねないエスノ・ナショナリズムのような社会運動を駆動させる力が作動しているという状況が、インターネットのような電子メディアのテクノロジーと無縁ではないことを確認しておく必要がある。つまり、インターネットのコミュニケーションがグローバル・ヴィレッジを構成しようとするベクトルを活性化させているのに、これとは全く無関係な別の社会的な圧力がこのベクトルを無効化したり、乗り越えたりしているわけではないのだ。

このことをよく示しているのが、ベネディクト・アンダーソンが「遠隔地ナショナリズム」と呼ぶ現象である。遠隔地ナショナリズムとは、インターネットによって可能になったエスノ・ナショナリズムである。アメリカには、さまざまな民族が共存している。たとえばアメリカにもクロアチア人がいる。もしインターネットがなければ、アメリカのクロアチア人は彼らの「故郷」となるヨーロッパのクロアチア人と連帯することはできず、その共同体に参画することもなかっただろう。だが、インターネットのおかげで、アメリカのクロアチア人もクロアチア人の民族運動を支援したり、参加したりすることができるようになる。実際、たとえば、北アイルランドのIRAの活動を支えている有力なグループの1つは、インターネットを使って彼らを支援しているアメリカのアイルランド系市民である。インドでは、対立しているヒンドゥ教徒もイスラーム教徒も、それぞれ、インターネットを媒介にして、世界各地に散在する同胞からイデオロギ的・資金的に援助を受けている。

## インターネットは「n対n」のコミュニケーション

かつて、アンダーソンは、古典的な国民—19世紀から20世紀中盤までに登場してきた国民—の創出にあたって、メディアの果たした機能について、実に鮮やかな分析を提示した。彼が特に重視したのは、マスメディア、とりわけ資本主義と結託した出版メディアの役割である。最もわかりやすい例は、「新聞」である。新聞は、主に国民の範囲に配布される。それゆえ読者は、毎朝、新聞を読むときちょうど国民の規模で、同じ情報を同時に得ているはずの可能な読者の集合を想定することができるだろう。その結果として、新聞の読者の潜在的な共同体として国民の連帯が結晶するというわけだ。マスメディアが作り出すコミュニケーションの外形は、1対nの形態をとる。すなわち、それは特定の一人から不特定多数の他者への（主要には一方向的な）コミュニケーションである。「1対n」の「n」の領域として国民が想定されたのである。インターネットの特徴とは何か。外形に着眼すれば、それは「n対n」のコミュニケーションである。つまり、それは不特定多数から不特定多数へのコミュニケーションである。簡単にいえば、任意の者に、かつてのマスメディアに匹敵する情報の配信能力を与えるシステムである。しかも配信が可能な範囲は、地球規模のネットワークに接続している任意の端末に広がっている。たとえば、私が今あるサイトで読んでいる情報を同じように享受しているかもしれない読者の拡がり、地球大である。そうであるとすれば、インターネットが地球的な共同体を結実するだろうと素直に予想したくなるのも当然だ。いい換えると、インターネットが地球的な共同体よりもむしろ、国民をも細分化するような、小規模でメンバーを散在させた—遠隔地ナショナリストのような—共同性にこそ親和的であった理由は、コミュニケーションの外形には還元できない特徴、コミュニケーションの内的な構成と

も呼ぶべきものに求めなくてはならないということになる。

### 精神の内面／外面の不能性

コミュニケーションの構成は、一般には次のように図式化されている。一方の極で情報の発信者が、他方の極で受信者が、それぞれに閉じられた「内面」を構成している。受信者は、発信者の内面で生じたメッセージを直接に参照することはできない。受信者が発信者のメッセージを知るためには、まず何らかの方法による両者の接続が必要である。その上で、発信者は、メッセージを両者が共有するコード—記号体系—に翻訳しなくてはならない（エンコーディング）。コード化されたメッセージが受信者によって解読という形態で、「内面」化される（デコーディング）。コードへの翻訳を媒介しなくてはならないという意味で、コミュニケーションは必然的に間接性を帯びるのだ。つまり、われわれはコードの上に外化されたメッセージを通じて、二次的に発信者の「内面」の真実に接近するしかない。ところで、サイバースペースではよくある次のような状況を思い描いてみよう。実生活では地味でうだつのがあらないおとなしい男が、コンピュータネットワークではハンドルネームを用いて攻撃的な男として振る舞っているとしよう。他人が直接に對し得るのは、攻撃的な男としての言葉のみである。このとき攻撃的な男という仮面の背景に、物静かな男という内側の真実が隠されていると理解すべきだろうか。むしろわれわれは、表面に直接に外化されている攻撃的な男としての欲望にこそ、この男の内面の真実を見るべきではないだろうか。つまり、ここでは、他人（受信者）の直接の接触を許す外面においてこそ、かえって、より一層の内的な真実が直接に露呈しているのである。こうしたよくある例に示唆されていることは、電子メディアによるコミュニケーションは、コミュニケーションの内的な構成を劇的に変容させつつあるということであ

る。本来のコミュニケーションにあつては、人は、他人の内面に、物理的な接触やコードを間に挟むことによって、間接的に接近するしかなかった。だが、電子メディアとともにあるコミュニケーションが提供しているのは、本来は必然的に間接的で背景に退いていた内面に、直接に接触し得るという感覚であり、そうした内面を、直接に露呈させて送信し得る感覚である。

インターネットが、地球大の単一の共同体への統合のダイナミズムよりも、メンバーを地球上の諸地点に分散させた多数の共同体への分解へと向かうダイナミズムと親和的な理由はこの点から説明できる。インターネットが実現したコミュニケーションの外形にのみ着目すれば、それは地球的な共同体をもたらしやすに見える。だが、コミュニケーションの内的な構成は、次のことを含意している。すなわち、インターネットにおいて支配的なコミュニケーションが指向しているのは、互いの内面に直接にアクセスしあうような関係、つまり内面の繊細な感覚の水準で共振しあうような関係だということである。こうした内面の感覚の全水準における共振は、いわば私的な関係であり、必然的に、関係の拡がりを、いくらでも小規模なものへと細分化させていかざるを得ない。内面的な細かな感覚に拘泥すれば、いくらでも関係には不協和が生じ得る。つまり、共鳴にまでいたるような内的な感覚の共有を想定し得る共同性は、細分化していく顕著な傾向があるのだ。それゆえ、インターネットは、その物理的な範囲としては地球規模の拡がりに可能性を開きながら、人々が実際に互いに連帯していると感受し得る共同性の拡がりを、かえって縮小させさせようとするのである。人は、インターネットの技術的な助けを借りて、地球の反対側の誰かと互いに共振し合っていると実感し得るのに、樹立される共同性の範囲は私的に狭小なものへと分解していくのである。

（大澤真幸 京都大学人間・環境学研究所助教授）



## [インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ [iwp-info@impress.co.jp](mailto:iwp-info@impress.co.jp)